

高校二年の夏、私は一冊の不思議な本を見つけた。表紙に題名も何も書かれていない本だった。学校の図書室で借りてきた本に混ざっていたが借りた覚えも、もちろん買った覚えもなかった。家に帰ってから気付いた私はどうしようか少し迷っていた。だが、表紙に何もないその本が気になって仕方がなく、表紙を開いて、中を見てみることにした。

『君は楽しい日々を送っていますか。世界は色付いて見えますか。』
最初のページにはそれしか書かれていなかった。私は一体何のことを言っているのか分からなかったけど次のページへ進んだ。

『俺の目には名前のせいもあるのか 世界は真っ白に見えます。』
『人も物も色を持っていない。温かみも何も感じない。だからつまらない。』

次のページにはそう書いてあった。そして、また次のページを見た
とたん私は固まってしまった。

『助けて。』

昨日見た、あの本のことか頭に残っているまま、私は学校へ行った。
結局、昨日は最初の三ページしか見られなかった。

（『助けて。』って書いてあったけど・・・あれって何かの物語のかな。続きが気になって期限まで返すのやめたけど、あれって学校

の本だよ。借りた覚えはないけど。世界が白く見えるって何かの病
気かな)

学校に行きながら考えていると後ろから肩を叩かれた。

「おはよー虹こう！」

「あ、おはよう。蒼衣ちゃん。」

「何か考え事？ポーンとしていたけど。」

「え、そんなことないよ。あ、今日のお昼購買行きたいんだけどい
い？」

「おーもちろん。」

この子は川田蒼衣ちゃん。中学からの親友で家もわりと近い。だから、よく一緒に学校へ行っている。蒼衣ちゃんはバレー部所属で次期部長である。運動部は朝から練習があり、一緒に行けないときもある。私は音楽部だけど運動部より朝の練習は少ない。蒼衣ちゃんはいつも忙しそうだ。なのに、成績上位者。明るくて誰とでも仲良くなれる性格だから友達も多い。よく遊びの誘いも受けているし、よく遊びにも行っている。いろいろなことに関してごくごく普通な私からしたらとても羨ましい存在である。

(忙しそうなのにいつ勉強してるんだろう)

蒼衣ちゃんと話しながら歩いていたら学校に着いた。下駄箱のところで何人かのクラスメイトに会って皆に挨拶して教室に向かった。蒼衣ちゃんはさっきのクラスメイトたちと話しながら来ている。私は挨拶するけどそこまで親しくない。蒼衣ちゃんの周りには常に人がいると思う。自然と周りに人が集まるのだろう。クラスだけでなく学年内でもかなりの人気者だ。

教室についてから先生が来るまでの間に蒼衣ちゃんに昨日の本のことを話そうかと思っただけどやめた。前に相談事があり話してみたら軽く返されてしまった。

(まあ、あまり重く考えないのも蒼衣ちゃんの長所なのかも)

蒼衣ちゃんやほかのクラスメイトと話していたら、チャイムが鳴り、先生が教室に入ってきた。そのとたんに、ガタガタと椅子の音が響き皆、自分の席に座った。

「起立ー」

だるそうな日直の声と共に皆が立ち

「礼。」

「おはようございます。」

一斉に礼をして挨拶をする。

「着席ー」

まただるそうな声と共に皆が「だるい」「眠い」などと呟きながら座った。

「えー今日転校生が来てるから連れて来るな。」

新学期でもないのに珍しい。先生がそう言ったとたん教室中がざわざわと少し騒がしくなった。

（転校生って初めてかも。なんか楽しみだな）

しばらくして、先生が戻って来た。先生の後ろにはきれいな制服を着た男子生徒がついて来た。背は平均より少し高め、肌は少し日焼けしていた。先生が黒板に彼の名前を書き出した。相変わらず汚い字だな、なんて思っていた私は彼の名前に少し驚いた。

「えー今日からうちのクラスに来た澤井真白くん。澤井、皆に挨拶。」

「はい、澤井真白です。よろしくお願ひします。」

きれいな白い歯を日焼けした肌から覗かせて彼が言い、ペコリと軽く頭を下げた。私は昨日の本のことを思い出していた。

（真白なんて珍しい名前だな）

先生の「澤井の席決めるついでに席替えするか。」という嬉しい一声で皆のテンションは高くなった。

席替えの結果私は廊下側の一番後ろの席で蒼衣ちゃんや他の仲のいい友達とわりと近くなれた。それから、澤井君も私の斜め前と、

近かった。名前のこともあり気になって少し見ていたら、彼も振り返って目があってしまった。

(やばい、目合っちゃった)

私は少し恥ずかしくなってしまうと目を逸らした。相手が気にしていないか、もう一度こっそり見てみたら彼の寝癖が見えた。

(よかった。気にしてないみたい。てゆうか、寝癖ついてる。急いで来たのかな)

先生の話はほとんどどうでもいい話だったので聞き流していたら、朝礼が終わった。

朝礼後、一時間目が始まるまでの空き時間。転校生の周りには早速人だかりができていた。「澤井君ってどこから来たの?」「真白って珍しい名前だよね。」などなど、様々な質問が聞こえる。「よく言われるんだ。名前のこと。」「へーやつぱりそうだよね。」彼も普通に返している。すでに周りの人と笑いながら話している。

(きれいな笑い方だなー)

「ねー虹、うちらも澤井君のとこ行こうよ。」

「え、あ、うん。いいよ。」

蒼衣ちゃんに声をかけられ、いつもお昼と一緒に食べているグループで教室にできている人だかりの中へ突入した。

「やつほー澤井君!うち川田蒼衣って言うんだ。よろしく。」

「あ、澤井真白です。よろしく。」

「皆知ってるよー」

「あ、そっか。」

早速、蒼衣ちゃんは澤井君と話し始めた。「ほら、虹も自己紹介しなよ。」と小声で蒼衣ちゃんに言われて、私は初めて転校生の前で口を開いた。

「野崎虹です。」

「こう・・・もしかして、虹って書く?」

「え、そうだけど何で知ってるの。」

名刺を見せたわけでもないのになぜ知っているのだろう。不思議に思っていると彼が答えた。

「あ、いや・・・さ、さつき先生の持ってた座席表が見えてさ・・・虹って名前の人がいるなーって思ってたさ・・・」

「そうなんだ。」

このとき彼が少し慌てているように見えたのは気のせいだろうか。

「お前らさ、澤井君、澤井君ってもう一人澤井がいるの忘れたのかよ。」

休み時間、またできていた教室の人だかりにいたもう一人の澤井、澤井一貴が言った。

「あ、ゴメーン忘れてたー(笑)」

蒼衣ちゃんが軽快に返すと周りから笑いが起こった。転校生の澤井君も一緒に笑っていた。

「えー忘れてたってひどくね。じゃ、俺のこと下の名前で呼んでくれよ。」

「やだ。澤井は澤井だもん。今さら変えられないよー。」

「じゃあさ、俺のこと下の名前で呼んでよ。そうすれば区別つくんじゃない？」

すでにクラスの輪に馴染みつつある澤井君が自ら提案してくれた。

「だな。じゃ名前で呼んでいいか。」

澤井が聞くと澤井君が笑顔で答えた。

「うん。俺も皆のこと名前で呼んでいい？」

「いいに決まってるだろ。」

そういうながら一貴の方の澤井が真白のほうの澤井君の背中を叩いた。これまた、折れるんじゃないかっていうぐらい豪快に。アメフト部で鍛えられているうえ、もともと馬鹿力で叩くから細身の澤井君が大丈夫か少し心配になった。そして、案の定、叩かれていた澤井君がむせた。

「ちよつと、叩きすぎ。というか力加減しなさいよ。」

蒼衣ちゃんがすかさずフオローに入る。

「あなた、目つき悪いから真白君に怖がられちゃうよ。」

「え、ゴメン。」

澤井は一度似たようなことを後輩にしたら、その後輩が涙目になってしまったことがあり、澤井自身かなり落ち込んでいた。「俺ってそんなに怖い顔してるのか・・・」とずっと呟いていた。その姿からは怖さなど微塵も感じなかったが。

「そんなことないよ。」

真白君が笑顔で返すと澤井は少しほっとしたような顔を浮かべた。

「あと、君付けじゃなくていいよ。呼び捨てで。」

「了解した。じゃあ、真白！」

「おう！」

皆で、というより蒼衣ちゃんや澤井が中心となって話していたら休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

真白君がクラスに来て一週間がたった。真白君はクラスにすぐに馴染み毎日楽しそうに過ごしている。私はまだあまり話せていないが。新しいクラスメイトの話題で蒼衣ちゃんや他二名のクラスメイトと盛り上がりながら帰っていると、ちょうどそのクラスメイトが歩いていた。「噂をすれば、ってやつだね。」「そうだねー」と間宮清香と合口美咲が話している。私は二人の声を聞きながら前を歩くクラスメイトと、彼を見つけた途端に走って行き、今彼と仲良く話している蒼衣ちゃんの背中を見ていた。

（あの二人、仲良くなるの早いなー）

すると、彼が振り返った。私は目が合って少しドキッとしたが彼は満面の笑みでこちらに手招きした。私たちは三人で小走りして二人に追いついた。そこから五人で様々なことを楽しく話した。

皆と話しているいつもの分かれ道にきた。私だけ右に行くのだが今日は一人じゃなかった。皆と別れようとしたとき彼も同じ道を来

た。

「真白君もこっちなの？」

皆と別れて二人で歩きながら話した。

「うん。家近いかもね。どこ住んでる？」

「あそこの道曲がった先だよ。」

「え・・・俺もなんだけど。え、すげー近くね。」

「だね。でも、いつ引越してきたの？トラックの音とかしなかつ

たと思うけど・・・」

私は純粹に気になったことを口にした。

「・・・俺、引越してない。前からそこ住んでる。」

「そうなんだ。前の学校、廃校とかになっちゃったの？」

「・・・いや、違う。」

「ふーん、じゃあなん・・・」

「何も知らないくせに・・・」

私が言いかけていた言葉を遮りながら、聞こえていないふりをしながら彼は言った。すごく冷たい、そして怖い声をしていた。私はそのとき初めて気付いた。彼が暗い顔をしていたことに。

「ゴメン、俺先帰る。じゃあね。」

「あ、うん。バイバイ。」

彼が学校に来て一週間、初めて見た暗い表情だった。

真白君が先に行ってしまったので一人で道を歩いていた。家の玄関まで来ると中から突然何か割れる大きな音がした。

（ああ、またか）

前までなら驚いていた。だけど、最近はまだ慣れた。玄関のドアを開けた途端に聞こえてくる騒がしい声。また夫婦喧嘩。最近よく夫婦共に怒鳴りあっている。基本口だけだが熱くなるとさっきみたいにか何を壊したりする。さっきもお皿でも割ったのだろう。

「はあー、ただいま。」

一応帰ってきたことを知らせる。だが、聞こえていない。いつもの

ことだ。だけど人が争っているのはいつになっても慣れないし嫌だ。特に私は友達や家族が争っているのを見たり聞いたりするだけで息が詰まったように苦しくなる。自分のことでもないのに泣きたくなるときもある。だからこうなると一人になりたくなるが、私の親は二人とも喧嘩を始めると周りが見えなくなる。ご飯を作らずに喧嘩しているときもある。そういう時は自分で何とかしなくてはいい。

(今日はあの本の続き、読めるの寝る前かな・・・)

親が夫婦喧嘩していたリビングで家族三人で夕食をとった。だが、会話は無かった。ずっと苦しい思いをしていた。

やることを終え、やっと本が読めるようになった。さっそく続きのページを開く。

『息が詰まりそうになるくらい苦しい。』

『ときどき、自分が家族から愛されているのか分からなくなる。』

『ただ真広に嫉妬しているだけかも知れない。』

(真広って誰だろ。兄弟とかかな。兄弟とかいないから分かんないや。兄弟とかに嫉妬ってするものなのかな)

『だけど、あの出来事には差別みたいなものを感じた。すごく悲しくて、淋しい気持ちになった。』

あの出来事が何なのか気になった。だけどそれが一体なんだったのか書かれていなかった。

(この人の悩み、家族のことかな)

『高校二年といってもまだ子供だ。だからわがまま言ってもいいの

かもしれない。』

『だけど、家族に迷惑をかけてしまうのでは、と思うと本音が言えなくなっていた。』

(家族に本音言えないの分かるかも。これってすごく苦しいんだよね。この人同級生なんだ)

『皆に気付いてほしいと願っても、家族だって人だ。言わなきゃ伝わらなかった。』

『だんだんイライラしてきて、母さんと喧嘩した。』

『喧嘩がエスカレートしていくうちに母さんから色が抜け落ちていくように感じた。人の肌色の温かき、目の奥の真剣さ、何もかも白く見えて、何も感じなくなった。』

私ははっとなった。

(最初に書いてあった『世界は真っ白』っていうのはこういうことだったんだ。病気とかじゃなくて、つらいことがあってこう感じるようになったっちゃったんだ)

私はどんだん読み進めていった。

『そうなるのと周りの景色も人も全てそう見えるようになってきた。』
『母さんと仲直りはしたけど白く見えることは変わらなかった。』

その日はそこまですておいた。

(あ、この本、明日返さなきゃいけないじゃん。まだ読みきつてないけど延長できるかな)

私はそう思い出し学校に持っていくために鞆に本をしまってから眠りについた。

次の日、学校に行くまでに蒼衣ちゃんや清香ちゃん、美咲ちゃんとは会わなかった。真白君にも。昨日別れるときに見せた彼の暗い表情が気になっていた。

学校に着き教室へ行った。そしたらいつも通りの賑やかなクラスが広がっていた。

「おはよー虹」

「おはよー」

皆に挨拶をしてから自分の席についた。いつもはそこから皆と話すか本を読んだりしている。だけど今日はある人に声をかけられた。

「おはよ。虹、あの、その・・・昨日はゴメン。」

「あ、おはよ、真白君。昨日・・・て、謝るのは私の方だよ。言いくそうだったのいろいろ聞いちやっでごめん。」

「いや。でもよかった。虹、昨日のこと気にしてないか心配だったんだ。よかった。」

「大丈夫だよって・・・え・・・」

「うん？」

「あ、いや、今虹って・・・」

「あ、うん。嫌だった？なら、苗字で呼ぶけど・・・」

「ううん。う、嬉しい・・・です。」

「そ、そっか。よかった。あ、あのさ。俺のこと呼び捨てで呼んでほしいんだけど・・・いいかな？」

「う、うん。」

私と真白君、いや真白が少しぎこちなく話していると蒼衣ちゃんや澤井たちがやってきた。

「お、仲いいね。いい雰囲気？」

澤井がいじりにきた。

「この二人家の方面一緒だったんだー」

「そうそう、方面一緒どころかめっちゃ家近かったんだよ。」

真白は気にする様子も無く普通に話し始めた。そのおかげで特に嫌

な気持ちになることもなく、楽しく皆で話すことができた。

(真白といるとなんだか楽しいな)

昼休みになり図書室に借りていた本を返しに行った。もちろんあの本も。静かな図書室に入り、読書をしている人たちの邪魔にならないよう気をつけながらカウンターに座る司書の先生、土井咲こと咲ちゃん先生に言った。

「返却お願いします。後、この本借りた覚えなかったんですけど混ざってみたいで。すみません。ついでにちよつと読んじやいました。」

「あはは、そうなんだ。ちよつと待ってね。借りたかどうか確認するから。」

そう言いながら咲ちゃん先生がパソコンをいじった。咲ちゃん先生は生徒から人気の先生だ。とても話しやすい性格で私もよく相談したり、本のことで盛り上がったたりしている。だが、先生は本が好きすぎて本のことを話し出すと止まらなくなることがある。そして、どこか不思議な雰囲気漂っている。

「じゃあ、本の名前教えてもらっていい？」

「それが、これ題名書いてないんですけど・・・」

「え、ちよつと見せて。」

そう言われたので私は咲ちゃん先生にあの本を渡した。すると咲ちゃん先生の口から驚くことを言われた。

「この本・・・うちのじゃないよ。こんな本置いてないよ。」

「え、うそ。でも私買った覚えなし・・・」

「うーん。そんな本売ってるのか分からないけど、誰かが買ったのがいつの間にか混ざっちゃったのかもね。」

「・・・誰のだろう。」

「持ち主分かったらすぐ返せるように持ち歩いておくといいと思うよ。」

「ですね。そうします。ありがとうございます。」

「いえいえ、この後何か読む？お勧めあるよ。」

「今度にします。持ち主には悪いけどこの本の続き気になっちゃったんで、こっそり読もうかと。」

「あはは、そっか。じゃまた来てね。」

「はい、じゃあ失礼します。」

私は図書室を後にした。

（あの本、誰のなんだろう。早く返したほうがいいよね。でも持ち主が分からないことにはどうにもできないな）

それから数週間が経っても持ち主は分からないままだ。その間に私は少しだけ読み進めた。

『高校一年のとき友達からすごく悲しいことを言われた。皆と仲良くしているのは上っ面だけで実は仲良くしている人を選んでいくって。』

『俺は全然そんなこと思っていなかったのに。』

『わりといろんな人と仲良くできる性格だと思う。友達も多かった。』
『だけど、それが原因になった。』

『学校に居場所はあった。友達も仲間も味方もいた。』

『でも、俺は一人でいろいろ溜め込んでしまった。』

『俺は周りを頼るといことができなかった。』

本の中の彼はいつも我慢している。家族のことも友達のことも。そして、苦しんでいる。

（この人いろいろ背負いすぎだよって・・・）

「やば、もうこんな時間じゃん！」

（時間あるからってのんびりしすぎた。今日は朝、練習あるのに）

あの本は咲ちゃん先生に言われてからいつも持ち歩いている。急いで鞆にしまつて家を出た。

私はこのとき思いもしなかった。あの本の正体を。

私は走って学校へ向かい、何とか練習に間に合つて安心した。額にかいた汗がひかないうち、すぐに練習が始まった。何人かが遅れてきて周りの人から冷ややかな目で睨まれていて、私はもう一度安心した。

練習後、教室に行く途中に真白と会った。

「おはよ、虹。」

「おはよ。」

「練習？」

「うん。真白も？」

「いや、俺は何もないよ。野球部今日じゃないもん。」

「そっか。」

私と真白は前より仲良くなった。メアドの交換もした。男友達は少なかったので私はすごく嬉しかった。

ちなみに、真白は野球部に入った。前からやっていたらしいし、性格のおかげもあり、すぐにチームに馴染んだようだ。今、ピッチャーとして練習中だそうだ。

二人で教室に入り、蒼衣ちゃんたちも加え、みんな話していた。最近よく、朝礼前にこうして話すことが増えたような気がする。

朝礼後、私が真白と話しているとクラスのある女子が蒼衣ちゃんの机の前に立って言った。とても怖い目をして。

「あのさ、蒼衣って皆と仲良くして好感度上げといて、実は仲良くする人選んでるでしょ。上っ面だけで。」

皆が動きを止め、二人に注目していた。その女子は蒼衣ちゃんと仲のいいイメージが私にはあった。だが、違ったのだろうか。

(それに今の言葉、どこかで聞いたような・・・)

するとその女子と同じグループの人が「そうそう、なんか皆と仲い

いですよーっていい子ぶってる感じがするよね。」と同意していた。蒼衣ちゃんは驚きながらもとても悲しそうな顔をしながら言った。

「そんなことないよ。でも、そう思ったなら謝る。ごめん。」

「だから、そういういい子ぶってるのがむかつくの。」

彼女が蒼衣ちゃんの言葉にかぶせるように大きな声で言った。

「じゃあ何でこの前うちらが遊びに誘ったのに断ったの？最近断ること多いし。」

「その日は用事があったって・・・」

「いつもそう言ってんじやん。どうせ、うちらじゃなくて虹とか清香たちと遊んでるんでしょ。」

「違うって！」

「もういいよ。」

一方的に言って彼女たちは教室を出て行った。蒼衣ちゃんは下を向いていたけど、泣きそうな顔をしているのは分かった。蒼衣ちゃんのところへ行くため真白に話の途中で抜けることを言おうと、真白のほうへ向き直った。

「ごめん、話の途中だけど抜けるね。まし・・・ろ？」

そのとき、彼の表情が暗くなっていることに気がついた。前にも見たことのある表情だ。

(あ、あのときだ。初めて真白と帰ったときだ)

「真白？どうしたの。」

「・・・え？あ、いや、なんでもない。で、何だっけ？」

「あ、えっと、話の途中だけど蒼衣ちゃんのとこ、行っても・・・」
そのときチャイムが鳴った。一時間目が始まる合図だ。

「おーい、さっさと席に座れー」

先生が入ってきて皆に言った。

「ごめん、やっぱり何でもない。」

そう言って自分の席に急いで戻った。さっきの二人もいつの間にか戻ってきていた。

(蒼衣ちゃん、大丈夫かな)

私は蒼衣ちゃんに何と声をかけようかずっと考えていた。だけどどうしたらいいのか分からず困っていたら、真白に話しかけられた。

「蒼衣・・・大丈夫か？」

「わかんない。でも、大丈夫じゃないと思う。あんなにひどいこと言われたんだもん。あー私なんでものとき、蒼衣ちゃんのこと助けられなかったんだろう。」

「助けるって？」

「だってあのとき私たちと遊んでたって誤解されてるから私たちが否定すればよかったのかなって思ってる。」

「そうだね・・・あのさ、蒼衣にちゃんと周りも頼るように言っておいてくれないか。」

「え、なんで。」

「蒼衣・・・俺のし、知り合いに性格似てて、そいつも同じような目にあつたことがあって・・・そいつ一人で全部抱え込んでつらい思いしちやっけてさ・・・だから同じ目にあつてほしくないから。」

「・・・そつか。でも、それなら自分で言ったほうがいいと思うけど・・・」

「いや。」

急に彼の声が小さくなった。

「俺は逃げた。だから、言える立場にいないよ。」

「えっ。」

(どういうことだろう。逃げたって)

小さな声でも私には聞こえた。きっと真白は言うつもりはなかったのだろう。少し慌てた様子で言った。

「あ、えっと、なんでもないから、気にしないで。とにかく蒼衣に言っというて。」

「う、うん。」

真白はそういうとどこかに行ってしまった。

そして昼休み。私は蒼衣ちゃんのところへ行った。

「あ、蒼衣ちゃん。」

「なあに？」

笑顔でいつもみたいに戻してくれた。だけど、その笑顔は悲しそうな顔だった。

「あの、その、朝のことなんだけど・・・」

そこまで言ったとき朝のあの二人が「ほらまた一緒にいる」「ね、やっぱり」と言っているのが聞こえた。それは蒼衣ちゃんにも聞こえていて蒼衣ちゃんはうつむいてしまった。そして少し震えた声で言った。

「・・・ごめん。うちにかまわないで・・・虹たちに迷惑かけたくないから、うち一人の問題だから。」

「そんな・・・」

「ごめん。」

そういつて蒼衣ちゃんは教室から出て行こうとした。私は何か伝えなきゃと、せめて真白から言われたことは伝えようと思ったときには蒼衣ちゃんの腕をつかんでいた。

「え、虹？」

自分でもびっくりしている。今までこんなに行動したことはなかった。

「待って、話だけでも聞いて。その後どうするかは任せるから。」

「虹・・・分かった。」

「よかった。それと真白からも伝言あつて。」

「真白から？」

「うん。」

そのとき、私はクラス中の視線が自分たちに向けられていることに気がついた。

(皆が見て話しくいいな)

「どうかした。」

蒼衣ちゃんが気付いてくれた。そして、「廊下で話そう。」と言って

くれた。自分がつらいときでも周りの人への気配りを忘れない、そんな蒼衣ちゃんが私は大好きだ。だから、助けてい。

「それで、真白からの伝言って？」

廊下に出て早速蒼衣ちゃんが聞いてきた。

「あ、うん。ちゃんと周りも頼れってさ。自分で言えばいいのにな。」

「そうだね。」

蒼衣ちゃんの声が暗くなった。

「でも、頼ったら皆に迷惑かけちゃう・・・」

「蒼衣ちゃん・・・あの、私からもいい？」

「うん。何？」

私は真白からの伝言だけじゃなく自分の思いも伝えようと決めた。

「私、友達いっぱいいる蒼衣ちゃんが羨ましかった。でも、ごくごく普通な私と仲良くしてくれて嬉しかった。いつも皆のこと考えてくれていてすごいと思った。私はそんな蒼衣ちゃんが大好きだし、そんな蒼衣ちゃんを私は、私は・・・」

自分の頬に涙が一筋、流れた。声が震えた。とっさに下を向いてしまった。

(でも、伝えなきゃ)

私は精一杯顔を上げて蒼衣ちゃんを見て言った。

「助けてい。だから、頼ってほしい。」

「うん。ありがとう・・・」

蒼衣ちゃんの声が震えていた。視界が涙でぼやけてあまり見えなかったけど蒼衣ちゃんが目元を拭っていたのは分かった。

「ありがとう、虹。あのさ、うち皆の誤解を解きたい。」

「そこは任せてよ。私たちが証言するから。」

「ありがとう。はあーどうしたらこういうことなくなるんだろう。」
蒼衣ちゃんはかなり真剣に悩んでいるようだった。私も一緒になつて考えていたらあることを思い出した。

(あの本の人も蒼衣ちゃんみたいなこと言われたって書いてあったな。何かヒントがあるかもしれない)

「あのさ、何か役に立つかもしれないのが、あるんだけど、教室から取って来ていい？」

「うん。ありがとね。」

私は教室に入ろうとドアを開けた。そうしたら、皆の視線が私の方に向いた。そしてある男子が「お、戻ってきた。おい、どうなったんだよ。てか、泣いてんじやん。」と言ってきた。私は泣いていたことをからかわれ、教室に入りにくくなってしまった。ドアのところはどうしようかと迷っていると、真白が声をかけてくれた。

「どうした。何かあったの。」

泣き顔を見られたくなつてとっさに顔を逸らした。

「いや、鞆取りたくて・・・」

「取って来るよ。」

「ありがとう。」

真白はすぐに鞆を取って来てくれた。

「はい。」

「ありがとう。」

真白のおかげで鞆を取ることができた。

「で、さっき言ってたやつは？」

「これだよ。」

私は鞆の中からあの本を出した。そして、朝に読んだところを開いて、蒼衣ちゃんに見せた。

「この本、すごい不思議な本なんだ。誰かの悩みが書いてあつて。たぶん主人公のだと思うんだけど。今日読んだところ、蒼衣ちゃんみたいにひどいこと言われたって書いてあつて、何か分かるかもつて思つてさ。」

「ふーん、不思議だね。で、何か書いてありそう？」

私は今日読んだところ、そしてその続きも読んだ。

『結果、俺は学校に行きにくくなって、転校することになった。』

『仲間に頼れないまま、仲直りも、何もできないまま俺は逃げた。』

それで終わっていた。後ろには何も書いていない白紙が続いていた。

「え、これで終わってる……。この本何かの物語とかじゃないの？」

「不思議だね。」

「うん。何も分かりそうにないね。なんか、ごめんね。」

「ううん。大丈夫。ありがとう。にしても、その本どこで買ったの？」

「これ、学校で借りた本に混ぜってたの。持ち主誰か分からないんだけど見つかったらすぐ返せるように持ち歩いてるんだ。」

「え。」

「表紙に何も書いてないし、不思議だよね。」

「……」

蒼衣ちゃんが急に黙ってしまった。

「どうしたの。」

「……虹、それ、呪いの本じゃない？」

「……の、呪い？え、何その本。」

「うちもこの前、咲ちゃん先生から聞いたんだけど、最近この学校で何人かの生徒のところに表紙に何も書いてなくて、中には誰のかわからないけど、悩み事とか願いとかが書かれている本が知らないうちに鞆に入ってたっていう噂があるんだって。怖くない？で、何なのか分からないからその本持つてる人が本捨てちゃって、自分を恨む人の呪いだ、呪い本だって言ってるのが怖いよ。本当かどうかは分からないけど……」

私は驚愕した。

（何でそんなものが私のところに……。それと何であの時咲ちゃん先生私には言わなかったんだろう）

「でも、それってその人の知り合いのものなんじゃないかっていう噂聞いたよ。その人の知り合いが似たような悩みを持ってたんだってさ。もしかしたら、それも呪いの本だったら虹の知ってる人なんじゃない？」

蒼衣ちゃんから驚かされっばなしだ。

（呪いの本が知り合いのものかも知れないって・・・どうしよう。私何か大変なことに巻き込まれた気分・・・捨てたほうがいいのか。でも、もし知り合いならその人悩んでるってことだし・・・）

「蒼衣ちゃん、その本持つてる人に何か起こったりするの。」

「いや、たぶん大丈夫、噂の人はただ単に怖がってるだけらしいから。」

私は少し安心した。そして、さっきから思っていたことを打ち明けた。

「蒼衣ちゃん、私この本の人のこと助けたい。」

「え、虹、それってただの噂だよ。違うかもしれないんだよ。怪しい本かもしれないんだよ。いいの？」

「うん。ちよつと怖いけどもし本当ならその人のこと、助けたい。悩んでるなら力になりたい。」

「虹・・・あんた優しいね。分かったよ、頑張つて、うちも力になれることがあったら協力するから。」

「ありがとう。あのさ、このこと皆には・・・」

「分かってる、秘密にする。」

「なんか、蒼衣ちゃん助ける話からどんどんそれちゃったね。ごめんね。」

「ううん、心配してくれてありがとね。うちは味方がいるだけで嬉しい。もう、一人で抱え込まない。」

「うん。私はいつでも蒼衣ちゃんの味方だよ。」

私たちはお互いに目元を赤くしながら、笑いあった。

その後、真白や澤井、清香ちゃんや美咲ちゃんに協力を呼びかけて蒼衣ちゃんの誤解を解いていった。皆蒼衣ちゃんの性格を知っているので誤解を解くのは意外とスムーズにいった。あの二人は少し大変だったけど、最終的には私たちのことを信じてくれて、誤解は解けた。

蒼衣ちゃんがどうしたら誤解されないか、と悩んでいたが答えが見つかっただらしい。この前、笑顔で照れくさそうに言ってくれた。「またこういうことが起きても平気！だって、うちには頼れる味方がいるから。」と。私はすごく嬉しくなった。それを聞いていた真白たちもすごく嬉しそうだった。真白は少し安心したような顔をしていた。蒼衣ちゃんの悩みが解決し、私はあの本の悩みが誰のものなのか探し始めた。

探すといっても手がかりが本の内容しかない。本の中にも名前は出てこなかったし、今のところ分かっている人物の名前は『真広』という兄弟らしき人だけだった。クラスメイトや知り合いに「真広って人、知っている？」と聞けば見つかるかもしれない。だが、相手は悩んでいるのだ。悩みの種となっているかも知れない人物の名前はむやみに出さないほうがいい。私はどうしたらいいのか分からないまま、夏休みになってしまった。

夏休みは予定がたくさんある。大量に出された宿題にうんざりしながらも、私は夏休みを満喫していた。夏休みに入って三週間で、映画とカラオケ、さらに映画を楽しんだ。お盆明けには蒼衣ちゃんたちとプールに行く約束もしている。そんな夏休みを送っていた私に真白からメールがきたのは。

「明日空いてる？」
急だったけど私はすぐに返信した。

「ごめん。今おばあちゃん家。十七日なら帰ってきてるし、空いてるよ。」

私は新潟の祖母の家に行っていたのだ。真白からの返信はすぐ返ってきた。

「ありがとう。じゃあ、その日会える？」

「いいよ。どこか行くの？あ、蒼衣ちゃんとか澤井とか誘う？」

私はどこかに遊びに行くのかと思ってそうメールした。だが、違ったらしい。

「いや、二人で会いたい。駅前のお店、行くだけだから。」
びっくりした。二人だけなんて。驚きながらも私は「分かった。」と
いうメールをし、朝の十時に駅前で会うこととなった。

(男子と二人で出かけた記憶がない……。初めてか……。今から緊張してる。何でだろう)

そして、その日がやってきた。

私は集合時間より少し早めに来たのにすでに真白はいた。真白は私にすぐに気付いて笑いながら手を振ってくれた。なので、私は走っていった。

「ゴメン、待った？来るの早いね。」

「そうかな。じゃあ、行こう。」

「うん、駅前の店ってどこ行くの？」

「えっと、虹に選んでほしい。」

「え、どうということ？」

不思議に思って聞いたら、真白が恥ずかしそうに言った。

「あの、その、蒼衣から聞いたんだ。虹の誕生日がいつかって。もう過ぎちゃってたけどプレゼント渡したいと思って、でも俺あんまセンス無いから虹に好きなものを選んでほしくて……」

「え、いいよ。そんな、だって、私の誕生日、真白が来る前だったんだし……」

「いや、俺が渡したいだけだから……。あんまり高いやつは買えないけど、そこそこのやつとかは買えるから……」

「いや、その、悪いよ。そんな……」

お互いに顔を赤くしながら言っていたが、最終的に私が折れてしまった。そして、いくつかの店に行ったあと、私の好きな店に二人で入った。

(どれにしよう。これ可愛いな。でも、高いかな……。)

値段を気にしていると真白に気付かれてしまい「あんまり気にしないでいいよ。」と言われてしまった。といっても、やはり少しは気に

してしまった。でも私は値段も手ごろで気に入った髪ゴムを選んだ。それを真白に見せた。

「こういうの好みなんだ。あ、それなら、」
と言って店内の違うブースへ行ってしまった。すぐに何かを持って帰ってきた。

「じゃあさ、このストラップとか好みじゃない？」

そういつて見せてくれたのは星型のストラップだった。確かに私の好みのものだった。

「うん、こういうの好きだよ。センス無いつて言ってたけどそんなことないじゃん。」

「いや・・・今のはどういのが好みか分かったからで・・・」

「あはは、そうなんだ。」
「これも買ってあげる。あと何個か大丈夫だよ。」

親切に言ってくれたが何個も買ってもらうのは悪いのでそれは断った。だが、とても嬉しかった。

店を出たらよっぽど選ぶのに時間がかかっていたのか、昼食時になつていた。だから二人でご飯を食べようということになった。

「この店、おいしいね。」

真白がカレーを食べながら言った。

「でしょ、ここときどき蒼衣ちゃんとか美咲ちゃんたちと来るんだ。」

昼食に選んだ場所は私のお気に入りのお店だ。私はこのパンケーキが大好きで今もそれを食べている。いろいろな話題で盛り上がったいたら、この夏休み中にどこに行つたかという話題になった。

「そういえば、真白はお盆だけとおばあちゃん家とか行つたの？」
何気なく聞いただけなのに真白は急に黙ってしまった。

「・・・」

「どうかしたの。」

「いや、なんでもない。」

前に見たあの暗い顔をしていた。真白はきれいな笑い方をしていた。私はその笑顔が印象的な真白が暗い顔をしていることが気になった。

「何か、あったの。」

「何でもないって。」

何もなかったような顔ではなかった。私はそんな真白が心配になつて言った。

「何か悩んでるなら言ってほしい。」

「だから何でもないって。」

真白の口調が少し荒くなったように感じた。

「何でもないから、構わなくていいよ。」

私は前までならそう言われたらそこで止めていただろう。だけど今回は違った。真白が蒼衣ちゃんへの伝言で言っていた「周りを頼れ」というのは誰にでも、真白にも当てはまることだと思う。だから、その思いを伝えた。

「真白が言ってたじゃん、周りを頼れって。だから真白も頼って。私に言いにくいなら他の人でもいい。とにかく、一人で悩まないで。」
「・・・でも、俺はそのときのこと思い出すだけで、考えただけで苦しい。だから、誰にも言いたくない。」

真白は悩んでいることを認めた。その口調は今までに無いくらい弱々しかった。

「言ったら何か変わるかもしれないよ。」

私は相手を苦しくさせないように気をつけながら話した。でも、真白は少しうつむいたまま話そうとはしなかった。無理に話させたりしたくなかったので、私は自分の悩みを話すことにした。もしかしたら話してくれるかと願いながら。

「私のところね、両親仲悪いんだ。皆気を遣って喧嘩するほど仲が悪い、とか言ってくれるんだけど、そんなことないんだよね。お互いずっと文句を大声で言い合ってる、私がいても気にしないでずっと。だんだん慣れてきたけど、あの二人に私が認識されてないような感じがしてさ。透明人間になったような感覚になるんだ、あの二人といると。私の名前、虹って書くじゃん？親から小さいときに名前に込めた思い、聞いたんだ。いろんな色を、個性を持って、いろんな

人と仲良くなれるようになって言ってたんだ。小さいときはそう言われて何にも思わなかった。だけど、最近思うんだ、個性ってそんなに何個も持つてるものなのかなって。でも、個性がひとつでも皆と仲良くなれることはできる。でも、私はそうなれなかった。親の願い通りに育たなかった。両親からすれば虹色どころか透明になってた。そんな自分が嫌いになってた。だから、私羨ましいんだよ、真白のこと。すぐクラスの輪にも馴染めてさ。まあ、ある意味尊敬してます。出会ってそんな経ってないけど。ごめん、長々と話しちゃって。」

話し終えて真白の顔を見るとなぜか驚いたような顔をしていた。

「ど、どうかした？」

（私何か変なこと言ったかな・・・）

「いや、なんでもない。そうなんだ、虹も悩みあるんだな。」

「そりゃそうだよ。皆何かしら悩んでるって。だから一人で抱え込まなくていいと思う。話せばすっきりするよ。いつでも聞くからね、真白の悩み。」

「・・・ありがとう。今はまだうまく話せる気がしない。でも、今度また会っていいかな。また二人で。たぶんそのときに話すと思う。そしたら、聞いてほしい。いいかな。」

真白は少し決心したように言った。だから私は真白に精一杯の笑顔で答えた。

「もちろん。いつでも聞くよ。」

そのあと、近くのいろいろな店に寄り、二人で帰った。真白はもう暗い顔などしないでいつものあの明るい笑顔でいた。私はそのことがすごく嬉しかった。

それから一、二週間後だった。真白からまたメールがきた。

「この前はありがとう。今度いつ空いてる？」

「お礼を言うのは私の方だよ。ありがとう。明日空いてるよ。」

「じゃあ、明日いい？場所と時間は同じで。」

「いいよ。」

そうして、私は真白と約束をした。真白が話してくれることが嬉しかった。

次の日、前より早起きして前より早く支度して、家を出た。

駅前に着くとまた真白の姿があった。

「真白、おはよう。早いね。私前より早く家出たのに。」

「おはよう。俺も来たのさっきだよ。」

「ふーん、じゃあもう行く？この前のとこでいいかな。」

「いいよ。」

前の店に入り飲み物だけ注文した。今日はパンケーキも我慢だ。話途中に店員が来るのも嫌なので飲み物が来るのを待った。そして、私が本題に取り掛かろうとしたとき、真白が自分から話しはじめた。「俺、皆に隠してたことがある。まだ誰にも言っていないし、今のところ虹以外に話すつもりも無い。だから、皆には黙っていてほしい。」私は静かに真白の話を聞いていた。

「俺、実は双子なんだ。真広っていう兄がいる。」

私は驚いた。あの本に書かれていた名前と同じだったから。

(え、どういうこと。あの本は真白のだったの)

真白は少し下を向いていたから驚いていることはばれなかった。真白は続けて話していた。

「真広は結構甘え上手っていうか世渡り上手って感じなんだ。皆、無意識なんだろうけど、母さんとかばあちゃんとか、小さいときから真広ばかり可愛がってた。真広には頼まれなくてもいろんなものを買ってきた。小さいときはそれが嫌だった。でもだんだん気にならなくなってきた。家族から愛されなくてもいいと思ってた。でも違ったんだ。この前ばあちゃんから旅行先からのお土産が届いた。事前には聞かされたことが無かった。だから、すごい嬉しかった。服頼んで、サイズが分からないって言ってたからサイズも教えた。すご

い楽しみで嬉しかった。そのとき気付いたんだ、俺はまだ家族から愛されたかったんだって。俺は届く日が待ち遠しかった。そこでその日、俺が学校から帰ったら、もう届いて母さんが箱も開けてた。楽しみにしてたのに、なのに母さんが俺宛に届いたって言って渡してくれたのはハンカチだった。しかもあんまり好きじゃない柄だった。真広も服頼んであいつには届いてた。サイズが少し違うからサイズが無かったとか、たぶん理由があったんだと思う、そう思いたかった。服のことは分かる、でも俺は服を頼んだとき好みも言った。なのに全然違った。」

真白の声がだんだん震えてきているのが分かった。声が小さくなっていた。それでも彼は話し続けた。

「悲しかった。泣きたくなかった。改めて思った。俺は家族から愛されていなかった。泣きたくなかった。改めて思った。俺は家族から愛されていなかった。」

真白は泣いていた。

「ばあちゃんにはもう何も頼まない、そう言ったら母さんに怒られた。何言ってるんだって、代わりのもものだけでも買ってくれただけいいと思いなさいって。俺もいろいろ我慢してた。わがまま言ったら迷惑かって思ってた。でも、俺の思いに気付いてほしいってどこかで願ってた。でも、言わなきゃ伝わらなかった。だんだんイライラしてきて喧嘩になった。喧嘩したら母さんから感情が無くなっていくように感じた。何も感じなくなった。だんだん色がなくなっていく。白く見えるようになっていった。周りの景色も人ももう見えるようになった。色も感情も何も分からなくなった。つまりなくなった。ずっと、ずっと、」

泣きながら、それでも一生懸命話してくれた。

「苦しかった。それに、学校でも辛いことが起きた。この前の蒼衣みたいに仲良くする人を選んでる、って。そんなことないのに。悲しかった。でも、蒼衣みたいに周りの人たちに頼れなかった。それでどんどん仲が悪くなってって学校に居づらくなった。それで俺は・・・逃げた。」

真白が言い終わった後、赤い目をしながらいつもの明るい笑顔でこっちに向いた。

「ありがとう、聞いてくれて。確かにすっきりした。言っただけで良かった。」

そういつてもらえてすごく嬉しかった。

「そっか、よかった。でも、何も役に立てなくてごめん。」

「ううん、聞いてくれるだけで嬉しい。」

「そっか。本当によかった。真白、なんだか落ち込んでいるときがあつて心配でさ。」

「ありがとう、虹。あのさ、付き合わせてばかりで悪いんだけどしばらくここにいていい？その、な、泣き顔、あんまり外で見せたくない・・・」

「もちろん、じゃあさ、パンケーキ食べようよ。まだ飲み物しか頼んでないし。」

「あはは、いいよ。本当に好きなんだね、このパンケーキ。」

「うん。」

そこからは真白の涙が引くまでまた前みたいに楽しく話した。

また二人で帰った。真白と別れてから私はあることを決心した。

(私は真白を助ける)

夏休み前半から遊びに行っていた私はなんとか宿題を終わらせ、休み明けの久々の学校へ向かった。

「おはよー虹、なんか久しぶりだね。」

教室に入って最初に蒼衣ちゃんが声をかけてくれた。すでに清香ちゃんや美咲ちゃんも来ていて皆で話しているようだったので私も加わった。「宿題終わった？」「どこか行った？」など夏休みの話題で盛り上がっていた。そこに真白や澤井も来て、いつものメンバーで話していたら澤井が急に思い出したように言った。

「そーいや、真白と野崎、お盆のとき二人で駅前にしたよな？二人で何してたの？デート？」

ニヤニヤしながら冷やかしてきた。いつもは蒼衣ちゃんがフオローしたりツツコミをしたりしているが、この手の話題になると皆盛り上がりつつしてしまう。

「え、ホント、それ。なに、付き合ってたの？」

（蒼衣ちゃん、顔にやけてますよ）

「え、いや、その、つ、付き合っただけじゃないよ・・・」

「ホントに？照れてるだけじゃないの？」

清香ちゃんも冷やかすのは大好きな人だ。

「でも、顔赤いよ？」

（み、美咲ちゃんまで・・・）

「ほ、本当に違うから・・・」

「じゃあ、その日何してたのか教えてよ。」

言っても平気か確認がてら真白にアイコンタクトした。そしたら、少し顔を赤くしながら小さく頷いたので、私は話すことにした。

「真白に誕生日プレゼントを買ってもらったんだ・・・」

「へー、真白が来たときすでに過ぎてたのに？」

今までずっと黙っていた真白に皆の視線が移った。

「うん。その、俺が渡したいって思っただけだから・・・」

「ふーん、でもお前ら二人で雑貨店行ってたよな？俺気になってこっさり行って行ったんだ、途中まで。」

「あんた、それストーリーじゃない、何してんの。」

蒼衣ちゃんがいつも通りにツツコミを入れたが、「でも、気になるなー」とまたにやけた顔を向けてきた。

「えっと、その、真白が私の好きなものを買ってくれてるって言うてくれて・・・」

「それで、虹のお気に入りの店に行っただけ！もう、このくらいでいいだろ、いい加減終わりにしようよこの話。」

真白が顔を赤くしながら言った。私も恥ずかしかかった。「えーいいじゃん。」と言われたが真白は無視して話題を変えた。

皆忘れたと思っていたのに、昼休みになったらまた私と真白の話題

になった。

「そんで、何買ってもらったの？」

「え、またその話題？」

「いいじゃん、いいじゃん。で、何？」

「もー、髪ゴムとストラップだよ。」

「へー。あ、もしかして今つけてるこれ？」

「う、うん。」

そう、私は真白に買ってもらった髪ゴムをつけてきたのだ。でも、自分からつけているというのはなんだか恥ずかしかったのでずっと黙っていた。実はストラップも鞆につけてきた。恥ずかしかったが自分で言ってみることにした。

「じ、実はストラップもつけてきたんだ。」

「え、ホント、あ、これか！可愛いねー虹っぽい！」

「これ真白が選んでくれたんだ。」

「へーセンスあるじゃん。」

「でも真白、自分じゃセンス無いからって言ってたんだよ。」

私は話していてだんだん楽しくなってきた。その日のことをほとんど話してしまった。お昼のことは抜いて。

「あらら、真白君、彼女さんが全部話しちゃいましたね。」

「彼女じゃない！付き合っていないし！」

澤井が真白にニヤニヤしながら話しかけているのが聞こえてはつとした。そして、急に恥ずかしくなった。

「おーおー、そうですか、そうですか。でも顔赤いですよ。」

また、冷やかしが始まってしまった。私と真白は顔を赤くしながら澤井と蒼衣ちゃんと清香ちゃんと美咲ちゃんの冷やかしを受けながら昼休みを終えた。恥ずかしかったけどなんだかすごく楽しい一日だった。

夏休みが明けたと思ったら、次は私たちの学校は体育祭が待ち受けている。

「あー疲れるー」

「澤井、そう言うとき余計疲れる。」

体育祭の雑用を任されたという澤井と真白がずっと愚痴を言っている。二人の話を聞くとかなり重労働らしい。

「お疲れ様、はい、ジュースあげるよ。」

体育祭の前日、一日使って全校生徒で準備をする。休憩時間に蒼衣ちゃんがジュースを買ってきてくれた。なので、皆でそれをありがたく飲むことにした。

「明日、皆親来るの？俺のとき来れないって言ってたんだよね。」

「へーうちのときは来るってさ。」

「私のところも来ないよ。」

「真白は？」

私は少しハラハラした。真白が家族のことで悩んでいることは知っている。だから、家族の話題で傷つかないか心配だった。でも、平気だったようだ。

「俺のときは母さんが来るって言ってた。」

その声は嬉しそうだった。だから私は安心した。

休憩時間が明けたとき、皆がそれぞれの持ち場についたときに真白に思い切って聞いてみた。

「真白、あの、お、お母さんと仲直りというか、その何というか・・・」

「あはは、うん。母さんもあの喧嘩のこととかばあちゃんのこととか気にしてたみたいで、最近前よりも話すようになったんだ。」

「そっか、よかった。楽しみだね、明日。」

「だね。」

(明日、いい日になるといいな)

そう願って私は作業を再開させた。

体育祭当日。在校生も保護者もすぐ盛り上がっていた。応援合戦も各競技も白熱した楽しいものになっていた。空も快晴でとても気持ちのいい風がそよそよと吹いていた。そんななかあの出来事は起

こった。

昼休みに入りその間に行われるクラブ対抗リレー。真白は野球部のアンカーとして出る事になっていた。真白は他にも何個か競技に出るが、これが一番楽しみだと言っていた。アンカーを走るのは初めてで緊張するけど親にも是非見てほしいと意気込んでいた。しかし、真白のお母さんは見てくれなかった。

「何で、見れないの？」

真白の声が聞こえた。怒りや悲しみを含んだ声に聞こえて私はすぐにその声の方へ振り返った。そこには真白と真白のお母さんと思われれる人が立っていた。

「ゴメンね、今日真広の試合があつて見に行きたいの。午前中真白のところ来たから午後は真広のところに行きたいの。」

「試合って結構重要なやつなのか？」

「ううん、練習試合って聞いたけど。それより、試合の時間が早まつたりしてたら困るから行つてもいい？」

「・・・分かった。じゃあ。」

真白はすぐ悲しそうな顔をしていた。けど真白のお母さんはそれに気付くことなく行ってしまった。私はずっと見ていたので真白も気付いたのかこちらを向いた。そして、今にも泣きそうな顔だったのに頑張つて笑顔を見せていた。近づいてきて今の状況を説明するかのように話した。

「さっきの、俺の母さん。また、真広のそこ行っちゃった。変わつてなんてなかったんだな。俺、期待しすぎてたのかも。」

真白はずっと悲しそうな顔をしている。次が一番楽しみにしていたはずの競技なのに。私は真白にかける言葉を探していたがなかなか見つからなかった。だから、思っていることを話してみることにした。

「ま、まだ間に合う！今から追いかけて本当はちゃんと見てほしいことを伝えれば来てくれるよ、きっと。伝えなきゃ分からないんだよ、真白のお母さんは。だから言わなきゃ。」

「でも、もう行っちゃったし、もういいんだ。期待しすぎなければいいことだから。」

「そんな・・・」

私は悲しくなった。そして少し真白に怒りを感じた。きっと我慢して辛いのに我慢し続けていたからだ。伝えればいいのに、とだんだん思うようになりとうとう言ってしまった。

「言わなきゃ伝わんないのに言わないで、何で我慢し続けるの。真白が言わないなら私が言う。今からでも追いかけて言いに行くよ。」

「いい、そんなこと、しなくていい。」

「でも、それじゃあ真白は伝えようとしなないじゃん。」

「だからいいんだよ、これで。おせっかいなんだよ。」

ちよつとした喧嘩をしてしまった。私も真白も喧嘩は嫌だったのですぐにお互い謝った。だが、前より二人の間に流れる空気がぎこちなくなってしまう。

体育祭は大盛り上がりを見せ、皆は楽しく終わった。だけど私は真白とのことがあって皆ほど楽しめなかった。ぎこちなくなつてからお互いどうしたらいいのかわからなかった。だけど、私はあの日決心したことを思い出した。真白を助ける、と。もう一度決意した私はあることを思いついた。そしてそれで真白を救うことができるように願いながら進めていった。あまり、時間はかからなかった。

体育祭が終わって数日経った頃、私は放課後真白を呼び出した。あまり人目につかない裏庭にした。彼のことを待ちながら深呼吸を何回もした。そして彼の姿が見えたとき、一番深く呼吸をして気持ちを整えた。

(真白、これで君を助けられますように)

「突然呼び出してどうしたの？」

真白が早速聞いてきた。私は心の中で何度も大丈夫、大丈夫と呟きながら口を開いた。

「話があつて。それと渡したいものも。私ね、真白の悩み聞いてか
らずっと思つてたことがあるの。」

「何？」

（大丈夫、落ち着け・・・）

「私が真白を助けるって。体育祭のときちよつと喧嘩になつちやつたけどそんな気なんて全然なくて、あの時もどうしたらいいか考えて、でも分かんなくつて、ちよつと苛立つちやつた。ごめん。でも私はずつと真白を助けたいって思つてるよ。それで、考えてこの前思いついたんだ。真白を助けられるかもしれない方法。」

私は鞆の中からあの本を取り出して真白に見せた。

「こ、これって・・・」

「まあ、ひとまず読んでほしい。後ろのほうのページに私の思い、全部書いた。」

「う、うん。」

真白はページをめくつていった。私はずつと願つていた。

（これが真白の力になりますように）

『真白へ』

私は真白から悩みを聞いてとても驚きました。なぜならこの本に書いてあつた誰かの悩みと同じだったからです。この本は呪いの本と呼ばれているそうです。誰かの悩みが書いてあつてそれはその本を持つている人の知つている人のものかもしれないというものです。聞いたただけだと怖くて信じがたいものかもしれないけど私はこれに信じました。この本の悩んでいる人を助けようと思ひました。そして誰のものなのか探しているときに真白の悩みを聞き、分かりました。これは真白のものだと。だから、今からここに私の思つていることを書きます。

真白の前の学校でのことや家族のことを聞いて、なんでそうなつた

のか考えていました。どうしたらそうならないのか、ということも。それで、思いました。自分の気持ちを正直に伝えれば、何か変わるんじゃないかって。

真白は周りの人たちのことを思いながら行動している。だから、我慢ばかりしている。それを、続けていたからいつしか自分の本音を言えなくなっていて、いろいろ一人で溜め込んじゃうようになっていたんだと思う。でも、前の学校の人たちも皆頼ってほしかったんだよ、きつと。だけど、真白は我慢し続けちゃうから皆もどうしたらいいのか分からなくなっちゃたんだ。私だって、蒼衣ちゃんに誤解を解きたいって聞かなきゃ皆に説明するってことしたか分からないもん。蒼衣ちゃんから違うことを頼まれていたら違う行動をとったかもしれない。助けたいって思っている人はその相手の気持ちを優先したいんだよ。だから、真白からも本音を聞きたい。そして、真白の力になりたい。真白の世界が色付くように。

私はいつでも真白の友達で、仲間で、味方だよ。いつでも頼ってほしい。家族のことで苦しくなったらまた言ってよ。いつでも聞く。真白が苦しくても辛くてもその思いを私は受け止めるよ、いつでも。もちろん、他の皆も。皆、真白の一番の味方だから。

虹より』

真白が涙ぐんでいた。でもどこか驚いていた。

(まあ、この本の正体知ったら驚くよね。でも、)

「そこに書いてあることは全部私の本当の気持ちだよ。」

「……あ、ありがとう。でも、なんで、なんで虹もこれ持ってるの？」

「え……」

私も驚いた。一体どうということだろう。

「ど、どういうこと？」

「お、俺もこれ持ってる……。表紙の色違うけど……。そんで俺もこれ渡そうと思ってた……。虹に渡そうと思ってた……」

そうやって真白が鞆から取り出したのは表紙に何も書いていない一冊の本だった。でも表紙の色が違った。なぜか薄い虹色だった。

「これ、たぶん同じやつ。でも内容は違った。噂で聞いて虹と同じこと考えてた。この本の人、探してた。その人のこと助けたいって思ってた。それで虹とプレゼント買いに行ったとき偶然虹の悩み知って、これが虹のだって分かった。後ろの方のページ、読んでほしい。俺も書いたから。」

「え・・・うん。」

私は驚きながら、その本を開いた。

『君の色は何色ですか。』

『周りの期待に応えられていますか。』

(うそ、何これ)

『私は親から名前に込めた願いを聞いたことがある。』

『けど、私はその通りになれなかった。』

『そんな自分が嫌いになっていた。』

そこには私が前に真白に話した悩みと同じことが書かれていた。そして、ページをめくっていくと手書きで書かれたページが出てきた。

『虹へ』

急にこんな不思議な本渡されて驚くかもしれないけど、ここに俺の気持ちを書きました。

この本、呪いの本って呼ばれているらしいんだけど、中には誰かの悩みが書かれている。しかも、知っている人のものかもしれないという噂も。聞いただけじゃ怪しいけど俺はこれを信じることにした。だって、もしこれが本当なら悩んでる人が近くにいる、ってことに

なる。俺はその人を助けたいと思った。

その人が誰なのかを探しているときに虹から悩みを聞いて驚いた。だって、本と同じ内容だったから。俺はそのときこれが虹のものだったことが分かって、なんて言葉をかけようか考えてた。そのとき虹が俺の悩みを聞いてくれるって言うてくれて、それがすごい嬉しくて、だからもつと虹の役に立ちたいって思った。

虹が、親が名前に込めた願い通りに育たなくて、そんな自分が嫌だって言うていたけど、名前とか親の願いとかに縛られなくていいと思う。俺も、前に自分の名前で悩んでた。俺も親に名前に込めた思いを聞いたことがある。それはまっすぐな心でいろんな人に溶け込める真っ白な人になってほしいってものだった。俺は少しでも親の願い通りになりたくて頑張って周りの人皆と仲良くしていた。でも、あるとき思ったんだ。真っ白ってことは上から塗れば何色にでもなれる。だけどそれって自分自身の個性が無いように感じるって。それはすごい嫌だったけど、名前が人を表しているわけではないんだって思えるようになってからすごく気持ちが楽になった。だから、虹も自分の名前なんて気にしないでいいと思う。

それから、虹の両親のことだけど、俺も周りの人が喧嘩しているのは嫌だ。だから、やめてほしいって思うし、喧嘩し続けたって辛いままだから、気持ちを、正直な気持ちを伝えたいと思う。俺で良ければ力になる。いつでも頼ってほしい。俺みたいなことにはならないでほしい。

あと、一番伝えたいことがあります。

真白より』

私はすごく嬉しかった。そしてこの伝えたいことが何なのか気になった。

「ありがとう、真白。あの、この伝えたいことって・・・書いてないけど・・・」

真白が少し照れたように言った。

「それは自分の口で伝えたくて。」

そして真白がなぜか顔を赤くして言った。

「好きだ。虹のことが好きだ。」

私の心臓は破裂しそうなくらい脈を打っていた。そして、私はやつと自分の気持ちに気付いた。そして・・・

真白にあの本を渡してから、真白からあの本をもらってから数日が経った。私も真白も家族に本音を言うことができた。そして、この前あった授業参観では私の親も真白の親も来ていた。その日、真白はお母さんと楽しそうに話していた。

(良かった。真白、お母さんとうまくいってるみたい)

真広君も予定が空いていたらしいので来たという。さすが双子、ほぼ同じ顔だ。違いといえば真広君のほうがクールな感じがする。

(でも、本当に良かった)

その日の放課後、不思議なことが起こった。

あの本が消えた。いつも引き出しにしまっていた。だが、突然消えた。慌てて真白に言ったら真白も消えたという。あの本はほぼ毎日見ている。あの本のおかげで私たちの悩みは消えた。そして、今を楽しく過ごせるようになった。不思議に思いながら帰路に着くと蒼衣ちゃんからメールが届いた。

「真白と付き合うことになったんだよね。おめでとう！」

それと呪いの本について新情報！なんかあの本の表紙の色ってその本の人の個性の色を表しているんだって。あとあの本ってその人の悩みが解決したら消えるらしいよ。

あの本どうなった？誰のものか分かった？やっぱり呪いの本なのかな？」

蒼衣ちゃんからのメールで本が消えた謎が少し分かった。

真白に蒼衣ちゃんから聞いたことをメールしてから蒼衣ちゃんに返信した。

「呪いなんかじゃないよ。私は、私たちはあの本のおかげで今、楽しい。今、幸せ。あの本は私にとっては幸せの本だよ。」

薄暗い図書室に一人、カウンターに座る人影があった。

「あ、真白君のところも虹ちゃんのところも本戻ってきてる。悩み解決したんだ。良かった。良かった。さてと、次は誰にしようかな。でも、最初の子が呪いって怖がっちゃったのは失敗だったな。でも虹ちゃんたちが解決してくれて良かった。」

そう呟く彼女の胸元にあるネームプレートにある名前は【土井】。

「皆にばれないようにしなきゃ。ばれたらきつと驚くだろうな。この本全部私が作ったなんて知ったら。それに、私が別世界の人間だってことも。でも不思議だな、この世界の人は周りの人の考えてることとか悩みとか分かんないんだよね。まあ、だから悩みを解決するとか解決の手助けをするっていう私の任務が成り立つんだけどね。」

そう言いながら彼女は真っ白な本と薄い虹色の本を鞆にしまって部屋を出た。

「このまま皆幸せになればいいな。」

私たちの学校では不思議な本の存在が学園七不思議なものになり、

今でも本が消えたり現れたりしているらしい。どこから来てどこへ消えるのか分からない。謎ばかりの本だが、その本のおかげで救われた人がいる。だから、きっとあれは幸せの本なんだ。

私もあの本のおかげでいろんなことに気付けた。仲間がいること、味方がいること、そして、気持ちを伝えることの大切さ。

もしあの本を作っている人が分かったら伝えたいと思った。

ありがとう、と。